

コノハ(このわ)

盛松の人々が移転後、どこにうちを建てるかは、地下(じげ)のくじ引きで決めました。兄弟ばかりが並ぶとケンカするといけないと、誰かと交換することもあったとか。

峠

尋常小学校は4年生から三木浦へ。学校へ行くには、峠の国旗掲揚台に日の丸を揚げ、その旗を見つけた三木浦のサブロウじいさんが、船で二又へ迎えにきてくれました。

ジングさん
赤埼



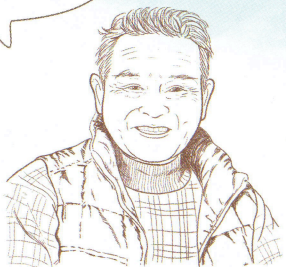
エビレ

盛松の兵九郎さんが頼母で稲作を始めた後、エビレも寺田として開拓。石積みが残ります。

6歳まで

盛松に住んどって、コノハに移転した後も盛松の畑で芋つくったり、お蚕さんのために桑の葉っぱ育てたりしました。船で二又へ渡ってそこから山越えて、行っとったです。

下地松夫さん



岩にも番地あり

磯から見える岩に、登記簿で番地がついています。ここに潜って、突いて魚を捕らえたそう。



太地

林兼水産という捕鯨船がきてたそう。網で仕切って、クジラを浜へ追い込んで打ち上げ、そこでクジラを捌き、子どもたちはみんなで追い番。網を巻くのを手伝いました。



地名の由来となった寺の老松が今も残る

盛松 さがりまつ

慶長6年(1601)の検地によれば、下松(さがりまつ)浦に27戸との記録が残され(三木浦は22戸、早田は7戸)、当時としては大きな集落であったことがわかります。ここに開基された海蔵寺に、松が枝を下げてそびえ立ち、それが地区の名の由来となったそうです。安政年間(1818-1830)の1772年、下松では縁起がよくないと「盛松」に改めます。海蔵寺は一度火事で焼けてしまい、400年以上前の古いものがなく、いつから人が住んでいたかはわかりません。集落は奥地と下地の2つの地区から成り立っていて、明治3年、苗字の使用が許されると、地区名をそのまま姓としました。明治7年(1874)の戸籍簿によると、盛松には27戸126人(三木浦は97戸542人、早田は52戸223人)。熊野灘を目の前にしても漁港がなく、限られた耕地や山林で暮らしを立て、生活に必要な水も湧き水が充分でなく、人が多くなると生活できないと、制限されていたとか。長男は家を継ぎ、それ以外の人は外へ出る人が多かったようです。電気もつかないことから、昭和2~3年に全戸が三木浦の湾奥「コノハ」地区へ移住しました。



1 集落入口の猪垣

移転後も戦前まで整備された猪垣。ここから出征兵士を送り出した思い出もあります。



2 運動場跡の飛び箱石

大正12年(1923)、三木小学校の分教場が海蔵寺に設置され、運動場もありました。



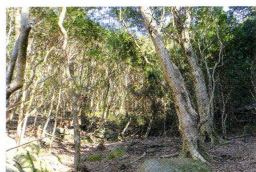
4 老松の大木

寺にそびえる松の木が、船からも見えたとか。今もひっそりと残っています。



5 石の水槽

一枚岩を削り貫いた水槽が下地地区共同の水場。谷は浅く、湧き水を溜めました。



7 鏡神社跡

集落の海際にあった鏡神社。三木神社には今も鏡神社の大きな鳥居が使われています。



8 荒磯と船着き場

船着き場の岩には杭を立てる穴や、歩きやすいよう手彫りの段差が残っています。

神ノ島